日本医学図書館協会のあゆみ(2)

—東北地区医学図書館の活動：人とその背景—

History of the Japan Medical Library Association (2)

東北大学附属図書館

長尾公司*

1. はじめに

日本医学図書館協会が本年をもって創立50周年を迎えると聞き、医学図書館員OBの1人として、心から慶賀の意を表したい。わが国における図書館相互協力の組織化の先駆をして以来、常に図書館界をリードし、最近では、学術情報流通システムの近代化、国際化の新しい波にも敏速に対応してきた本協会の業績は、ここに半世紀という記念すべき時点を越えることによって、より栄光に満ちた前途を期待されることになったといわなければならない。

今日、本協会の活動に言及せずには、わが国における図書館協力について論ずることが出来ないというのは、大方の常識となっている。近年いろいろな図書館協力組織が生れているが、本協会ほど整備され、成果を挙げている例は少い。これは、中央事務局体制の確立、加盟手続や相互貸借規程などにみる周到な配慮、財政基盤の整備への努力、機関誌の充実などに負うところが大きいと考えられるが、そうした中央の活動と表裏をなす地区活動を通じてのエネルギーの蓄積があることを見逃すわけには行かない。

筆者は、昭和27年から35年まで弘前大学で、35年から44年まで東北大学で、いずれも医学図書館の運営に当たりまた、昭和37年から44年まで本協会理事の末席を汚していたのであるが、その頃の東北地区医学図書館の活動状況を、記憶を辿りながら述べてみたいと思う。

2. 先駆者のこと

東北地区における医学図書館活動を語るには、その歴史の発端から居合せた2人の司書、すなわち、吉岡孝治郎氏（現、本協会名誉顧問）、小野寺俊治氏に登場して

もらわなければならない。

大正4年、当時の東北帝国大学に医科大学が設置されたことにより、翌5年、東北帝国大学附属図書館の官制がしかれ、同時にキャンパスの関係から医科分館が設置された。現在の東北大学附属図書館医学分館の始まりである。当時の医科大学関係者の英断によって、この図書館は、資料の効率的収集と運用とを図るため、集中管理方式を採用したわが国最初の医学図書館となり、それまでの医科大学等で資料の分散、重複が放置されていた状態とは全く異なる形で出発し、学内的にも予算、人事面での独立部局としての扱いをうけることになったのであるが、設置と時を同じうして、大正5年1月に当時の仙台医学専門学校から小野寺氏が転じて来て同年12月には、それまで暫定的に業務指導に当たっていた本館の田中敬司書に代って吉岡氏が主任格で、正式に転じて来たのである。創業期に優れた人材を得ることの重要なことは、何も図書館に限ったことではないが、吉岡・小野寺両氏は正にそうした意味での人材であった。

吉岡氏は、当時としては極めて新しい感覚の持主であり、集中管理による学術雑誌の効率的収集と運用、索引抄録誌など2次刊行物の重視、雑誌目次速報の創始などの新しい構想を次々に打ち出しているが、それが実に60年も昔のことであったことに驚かされる。

氏はまた、ファーマントン計画に大きな刺激を受け、その日本版ともいえる、のちに馬場重徳氏によって「吉岡原理」と名付けられた自説に拠って、東北地区大学図書館協議会の創立に尽力し、地区インフォメーション・センターの必要性を主張したことで判るように、図書館相互協力の重要性について最大の関心を持っていたので、本協会の前身である（官立）医科大学附属図書館協議会の発足を知るや、オブザーバーとして出席し、昭和4年（第3回総会）には、進んで加盟している。

氏は、昭和6年末にわが国政府がとった金輸出禁止の

*Koji NAGAO : Tohoku University Library

措置によって、円の対外為替レートが暴落したための影響から、独乙図書雑誌の入手価格がそれまでの2～3倍に騰貴したため、図書館、個人を問わず、独乙文献利用者が深刻な打撃を受けるという事態が発生した際、唯一人で、同じような影響を蒙っている英米両国の図書館関係者に書信を送って、事情調査を行い、本協会の第7回総会（昭和8年）に、「独乙医学雑誌高価問題につき英米国と協力の件」という協議題を提出し、事の成就を疑問視する人達を豊富な資料を使って遂に説得して、公式にこの問題と取り組むことを総会決議させ、その後も文字通り孤軍奮闘という形で、各国との連絡を重ね、昭和10年マドリッドで開かれた国際図書館会議に日本代表として出席した佐藤醇造氏に建議文を托して発言してもらった結果、独乙国内で発行される図書及雑誌は、同年9月9日以降輸出のものから、独乙政府補償法によって、25パーセントの値下をみることとなったのであるが、この事件は、本協会の存在を図書館界に知らしめることになり、氏の努力は、その経緯を知るものから賞讃されたのであった。昭和24年に医学部分館事務主任から本館事務長となった氏は、昭和28年に、医学部分館長の和田正男教授と共に、ロンドンで開催された第1回国際医学図書館会議に出席し、帰途欧米諸国を歴訪したが、独乙書値下げ問題での英米の同志と往時を語り合う機会を得たと聞いている。昭和43年春の生存者叙勲に際して、氏は勲4等瑞宝章を授けられた。その事由は、「医学図書館への貢献」であったが、国際的な活動が評価されたことは、いうまでもあるまい。

その吉岡氏が最も影響を受けた人物は、のちに東北帝国大学総長になった佐武安太郎教授であったようである。わが国有数の生理学者であり、医学図書館の理解者であった同教授を、吉岡氏は、生理学者であり、図書館学者であったJ. F. フルトン博士と対比しながら尊敬していたようである。前述の和田教授と、弘前大学で医学図書館整備に理解を示され、自らも尽力された佐藤熙教授（元、弘前大学長）は、共に佐武門下生であったが、筆者は、それぞれ別の機会に両教授からフルトンの事蹟についてうかがったことを今思い出し、あるいは、佐武教授ご自身が日本のフルトンをもって任じられ、吉岡氏にその医学図書館構想を托されたのではなかったかと考えるのである。

吉岡氏の「動」に対し、小野寺氏は「静」という表現の当てはまる人柄であった。昭和24年に吉岡氏のあとを襲って第2代事務主任に就任したが、創設時から吉岡氏

を補佐して内部の業務を着実にまとめ上げてきた功績は大いに評価されなければならない。

東北大学医学部が刊行している欧文誌、Tohoku Journal of Experimental Medicine は、大正9年の創刊以来、一貫して有料予約制と学術雑誌との交換を求める方針を採ってきている。これは、無償贈呈の多い大学紀要の中では特異であり、販路拡大と資料収集とが表裏一体となるようにという吉岡氏の提案になる販布方法の成功が、やがて東北大学図書館が国内随一の外国雑誌入手量を誇るに至る端緒となったのであるが、小野寺氏は、吉岡氏の下でこの国際交換業務を持前の緻密さと辛抱強さとして、1件1件定着させて行ったのである。このような国際交換業務は、相手方の信頼を得ることが先決であり、刊行の定期性が何よりも重要な条件であるが、Tohoku J. は、例えば、大正12年の関東大震災のため、欧文印刷可能な印刷所が壊滅した際には、米国のウイスター研究所に印刷の協力を求めたり、第2次世界大戦時には、医学部の教授らが講習会を開いて得た収入によって印刷用紙を調達するなどの苦心によって刊行を続けたため、海外における評価は高く、現在もなお、52カ国、513機関との間に交換契約が成立している。

昭和24年、吉岡氏のあとを継いだ小野寺氏は、戦時中に中断していた国際交換業務を再開し、戦前の盛況に復すべくその機を求めたのであるが、ようやく海外との文通の禁が解除されるや、パリのユネスコ出版物交換局に斡旋を依頼して戦前交流のあった海外の大学、研究機関に照会を発してTohoku J. の戦時中のバックナンバーと先方の出版物との交換を次々と成立させ、戦時中に入手出来なかったバックナンバー欠号約700タイトル分を入手した。これは、ひとり東北大学のみならず、海外との交流を断たれていた全国の医学研究者にとって旱天の慈雨の如き朗報であって、その内容が、「戦後到着外国雑誌目録（1948～52年到着分）」、「同改訂版（1948～54年到着分）」と2度にわたって各館に知らされたため、東北大学には利用申込が殺到し、あたかも全国的な資料センターの観を呈するに至り、のちにマイクロフィルム撮影装置の導入に進ませることになった。

また同じ昭和24年、NLM（当時は、国防省医学図書館）との間に文献複写サービスを受けるための交渉を成立させ、東北大学が窓口となって、この業務の管理に当ることになった経緯は、氏の尽力に負うところが多大であった。この取り決めは、日本国内に所在する資料は複写申込に応じないことや、同一文献の再申込は受けな

いことなどを含んでいたもので、東北大学は、受領したコピー（当初は、マイクロフィルム、のちにハードコピー）のカード目録を維持し、現物を利用者に貸し付けるという方式を採ったため、単なる申込斡旋ではない、かなり複雑な業務を引き受けた形になっていた。この事業は、昭和35年に至って本協会中央事務局にも窓口が設けられたことによって2つの窓口となり、やがて完全に中央事務局に一本化されて、東北大学の任務は終わった。

氏はまた、書誌学への関心を持ち、日本医学雑誌の発達について、特に「文図雑誌」についての考証の論文を昭和33年（1958）に、Bull. Med. Lib. Ass. に2度にわたって寄稿したが、これは恐らく同誌に掲載を許された日本からの寄稿論文の最初であろうと思われる。

仙台医学専門学校在職時から、東北医学会の機関誌「東北医学雑誌」の編集に関与していた氏は、引用文献記入法の統一、就中学術雑誌略名の標準化に特別の関心を持っていたのであるが、戦前刊行の学術研究会議編「日本医学雑誌並関係雑誌目録及略名表」（昭和7年初版、昭和14年2版）の増補改訂版の刊行の必要性を力説し、遂に本協会の手で「日本医学雑誌略名表」を刊行すべきことが決定されるや、自らその編集を買って出て、昭和34年に刊行に漕ぎつけたのである。この編集作業は、当時、東北地区4館の協力作業とされていたのであるが、本協会加盟後日の浅い弘前大学、岩手医科大学、福島県立医科大学の各館の名を本協会の事業に出してやろうという氏の思いやりの発露であり、私心のない恬淡さであった。大部分の作業は、氏の労によって行われ、3館は、データ照合や校正の一部を担当したに過ぎなかったのが実情である。

小野寺氏は、昭和35年に実に49年11ヵ月という永年勤続の記録を残して東北大学を退職されたのであるが、吉岡氏は明治26年生れ、小野寺氏は明治28年生れと、ともに八十路を越えて仙台市内にご健在である。本協会半世紀の歴史をつぶさに見て来られた両氏の長寿は、われわれ後輩にとっても心強いことである。

3. 東北地区の医育機関

第2次世界大戦前の東北地区には、東北帝国大学医学部の他に、昭和3年に創立された私立の岩手医学専門学校があるのみであったが、戦時体制下の要求に応じて、全国に所謂戦時医専が現出した昭和19年頃に、青森医学専門学校（国立）、福島県立女子医学専門学校、秋田女子医学専門学校の3校が創設され、昭和14年から、すで

に東北大学には、臨時医学専門部の設置をみていた。戦後、これらの医専は、経済の混乱期にあって、医科大学昇格への前提となるAクラス認定を目指して、学校と地元とを挙げての運動を繰りひろげたのであるが、遂に秋田女子医専は、Bクラスと認定され、廃校に追いやられその在校生は、Aクラス校の1年下級に編入されることとなって、やがて別れ別れになったのである。青森医専はまた、戦災都市青森市から弘前市に移転することによって辛うじて命脉を保ち、弘前医科大学（旧制）に昇格し、のちに弘前大学医学部となった。福島女子医専は福島県立医科大学に、岩手医専は岩手医科大学にそれぞれ昇格したが、その任務を終えた東北大学の附属医専は、昭和27年に最後の卒業生を送り出して廃止された。

こうした経緯を辿って、東北地区の医育機関の分布図は、戦後新しく塗り変えられたのであるが、弘前、岩手福島の3医大には、引き続いて、旧制度による学位審査権の獲得と大学院の設置という2つの関門を突破するための困難が待ちうけていたのである。とくに、必須条件として要求されている専門図書と学術雑誌の整備充実は正に図書館の責任に属することではあったが、乏しい予算で、急速な資料の増加を図ることは、館長、司書にとって難問中の難問であった。

当時の大学設置審議会委員には、慶応大学の草間良男教授（本協会初代会長）のような医学図書館界の事情に精通している委員が居られたことでそのように考えられたのかも知れないが、その頃、弘前医大では、本協会の加盟基準に達することが、設置基準に達していることの裏付けであると信じられていたので、大学院設置へ向っての努力は、本協会加盟への努力と同じ意味に学内では受け取られていたのである。

4. 東北大学からの援助

戦後新発足した3大学は、医専時代からの弱小な図書館を抱えていたのであるが、3大学とも教授陣に東北大学出身者が多かったこともあって、母校の援助、指導を期待する面があった。これに依って、吉岡氏は、自らその館に赴いて、ある期間、館員の指導をし、あるいは大学当局に勧告、助言をしているが、現在とは違い、交通事情、食糧事情の極めて悪かった時期だけに、吉岡氏には人知れぬご苦労があったことと思われる。3館とも本協会未加盟であったため、全国的相互利用への参加は望めなかったが、吉岡氏や小野寺氏のはからいによって東北大学からは、協会加盟館と何ら変らぬ利用上の便宜

を与えられたので、3大学の研究者は、文献の枯渇状態から免れ得たのである。とくに福島医大は、毎週1回、館員が東北大学に出張して図書を借用するという方法まで認められ、ゼロックス時代に入ってもこの定期便は続けられ、昭和46年まで実に20年に及んだのである。

東北大学からの援助の中で特筆すべきものは、見るべき資料を殆んど持たなかった3館に対する重複資料の放出であった。中でも、同じ国立の立場にある弘前大学はBer. u. ges. Physiol. u. exp. Pharmacol., Bd. 1(1920)～117(1940)を含め、当時の市場価格にして300万円を下らない入手困難なバックナンバー10数点の保管転換に与り、他の2大学も、多数の重複雑誌の譲渡を受けた他Tohoku J. のバックナンバー完揃を寄贈されている。

このようにして、弘前大学附属図書館医学部分館は昭和27年に、福島県立医科大学附属図書館は昭和29年に、岩手医科大学附属図書館は昭和31年に、それぞれ東北大学医学図書館の紹介によって本協会への加盟を実現しているが、東北大学の物心両面の援助がなかったら、これらの加盟は、もっと遅れていたに違いない。

5. 地区活動の萌芽

これまで述べたように、東北地区の3館は、それぞれ東北大学との結びつきを持ってはいたものの、横の連絡については、すでに結成をみていた国公私立を通じての東北地区図書館協議会の開催時か、本協会加盟後は、総会時に若干の顔合せ的な時間を持つ程度で、共通の問題を検討するための独自の会合を持つまでに至っていなかったのであるが、小野寺氏の発議によって決定した「日本医学雑誌略名表」刊行事業への参加が、各館相互の連絡の必要を生み、地区活動の種を蒔くことになり、各館の司書間の意志疎通が次第に円滑になってきた。前にも述べたように、この編集作業は、東北大学1館の能力で十分に成し得たものであったが、敢て東北地区の共同作業という名を冠したところに、小野寺氏の深慮をみるのである。

昭和35年に小野寺氏が退職され、はからずも、筆者が弘前大学から呼び出されて、東北大学医学図書館の第3代事務主任を命ぜられ、その結果、吉岡、小野寺氏の地区医学図書館協力体制についての構想を引き継ぐことになったのである。

たまたま、慶応大学図書館学科がロックフェラー財団の援助により計画した生物科学図書館員研究集会のため、客員教授として来日したブロードマン博士が、昭和

37年3月に沢本孝久氏を同道して東北大学を来訪されるという報らせが入ったことから、筆者は、当時の村上次男分館長と相談の上、本協会東北地区評議員館、東北大学医学図書館長の名をはじめて用いた公文書を発し弘前岩手、福島の3館宛、ブロードマン博士を囲む懇談会への出席を要請したところ、弘前大学竹森友雄司書、岩手医大伊崎正勝館長、福島医大丹野要司書の参集を得、東北大学からは、村上分館長と筆者、そして、ロンドンでの第1回国際医学図書館会議に出席したことで博士と面識のあった和田教授、吉岡氏も参加した。これは、未だ地区協議会が発足していないために採った臨機の措置であったが、博士は、弘前のような遠隔地からも東北大学からの呼びかけに応じて参集したことに驚かれ、いろいろ各館の事情や地区活動について質問されたのち、東北大学がこれまで果してきた役割は素晴らしいものであり、現在の協力関係をさらに強固な地区協力体制に発展させるべきであることを述べられた。その後、竹森、伊崎、丹野、筆者の4名は、東京での研究集会に参加したのであるが、その際にも、ブロードマン博士は、相互協力の必要性を力説され、われわれは、博士の意見に大いに啓発されて、それぞれ連帯感を深めて帰学したのであった。

6. 東北地区医学図書館協議会の発足

ブロードマン博士を囲む懇談会は、ようやく熟しつづあった地区活動組織化の気運に1つのきっかけを与えたことになり、同じ昭和37年7月に盛岡市で第18回東北地区大学図書館協議会が開催された機会に、その会議に出席した医学図書館関係者が最寄りの岩手医科大学附属図書館に参集した。会合の趣旨は、地区協議会結成準備会であったが、熱心な協議の結果、会の名称や事務局、会議の開催方法などの重要事項が次々に合意をみたので、これをもって第1回とすることにして、正式に東北地区医学図書館協議会が創立されたのである。誕生早々のこの協議会の仕事は、翌昭和38年8月に開催される本協会総会の当番館となっている弘前大学に対する地区としての支援体制を確立することであったが、幸いにして、協議会の創立が早まったので、すべて円滑に取り運ぶことが出来たのである。弘前大学竹森司書の手腕によって、総会の運営は見事なものになったが、東北地区各館から応援に加わった館員の働きも印象的であった。

当初、この地区協議会は、東北地区大学図書館協議会と同じ時期にその開催地で開催するという便法をとった

のであるが、年々協議すべき問題が多くなり、また地区が担当する本協会の事業も出て来たので、第4回（昭和39年）からは、独自に2日間の会期で開催するようになり、今日に至っている。

7. 中央事務局への協力

本協会が中央事務局体制を確立して以来、東北地区は本協会の全国レベルでの事業をしばしば担当した。東北大学（国立、旧帝大）、弘前大学（国立、いわゆる新6グループ）、福島医大（公立、戦時医専の昇格）、岩手医大（私立、戦前からの医専の昇格）とそれぞれ設置タイプの異った館によって地区協議会が組織されていること国立大学としては珍しく柔軟な図書館サービスについての考え方を持っている東北大学が、質的にも量的にも、地区センターとしての能力を持っていることなどの理由から、1つの事業を地区に持ち込むことの可否について最大公約数的な解答をひき出し易かったことから、わずか4館で人員の面で弱小な地区としては、大きな仕事をなし得たのではないかと思う。

筆者が理事時代に東北地区が引き受けた事業の中での大きなものは、昭和41年から昭和43年までの3年間にわたり開催を引き受けた医学図書館研究集会や、「日本医学雑誌略名表（昭和34年）」の改訂の検討から発展した「日本自然科学雑誌総覧」の編纂事業などが挙げられるが、それらと関連して、「医歯薬学参考文献の手引（昭和43年）」や、「医学図書館建築図集、1～2集」、あるいは、「MeSH Trees（複製）」、「Index Medicus 利用者のためのヒント」（NLM作成の翻訳）の配布を行い、「MLA: Vital Notes in Medical Periodicals」のレポーターを担当するなどのことがあった。

今にして思えば、筆者がいささか勢づいて地区に持ち帰った企画もあったわけであるが、現在も第一線に在る畏友、竹森友雄（弘前）、中村次男（岩手）、本田享（福島）の諸氏や、いつも根廻し役を買って出られた、今は亡き丹野要氏（福島）から受けた協力が若し無かったとしたらと、冷汗の出る思いである。この機会にあらためて心からの感謝の意を表するとともに、竹森、中村、本田各氏のますますのご活躍を祈りたい。

昭和43年3月から9月まで、筆者は、チャイナ・メジカル・ボードの援助によって渡米し、セントルイスに在るワシントン大学医学部図書館で、館長ブロードマン博士の許で研修する機会に恵まれたが、かって博士から貴重な助言を得た、東北地区の医学図書館活動の立派な成

長ぶりを報告することが出来たのは、大きな喜びであった。

8. おわりに

昭和44年4月、筆者は、九州大学附属図書館勤務を命ぜられ、東北大学を離れると同時に医学図書館の第一線からも去らねばならぬことになったのであるが、筆者の責任において、その時に書き残しておくべきことではなかったかと、反省しつつ、このような不確かな記憶による粗雑な記録しか書けなかったことをお詫びしたい。ただ喜ばしいことは、筆者のあとを、第4代平清二氏、第5代松川衛氏と事務主任のバトンが引き継がれ、東北大学医学図書館は、医学部、歯学部、薬学部、抗酸菌病研究所、医療技術短期大学と3附属病院と2分院を抱えた複合分館として、昭和51年に全国国立大学最初の分館事務長制を実現し、地区活動の中心として組織を強化していることや、地区レベルの活動では、BLLDへの複写申込窓口の一本化、地区未入手外国雑誌の分担購入、外国書目録カードの交換による各館毎共同目録の維持など次々と実施し、また、昭和48年の福島における第44回本協会総会の開催、昭和52年の第4回医学図書館員セミナーの仙台開催など、全国的行事の開催地引き受けなど積極的な活動を続けていることである。

これらについて報告することは、筆者の任ではないので、その時々に関係者が何らかの記録を残されることを期待するが、今や東北地区では、東北大学と岩手医大の歯学部、秋田、山形両国立大学の医学部新設、私立東北歯科大学の創立など、医育機関の分布図が再び塗り変えられるはじめており、地区協議会としては、本協会未加盟の秋田、山形、東北歯科の3大学図書館の育成の問題や東北大学がJICSTと接衝中のMEDLARS(CAS, JOISも)オンライン・サービスのターミナル導入の問題などが新しく起っており、第一線の司書諸兄の手腕に大いに期待が掛けられている状況である。

筆者は、本稿をまとめるに当たって、図書館協力でいつでも問題になる「誰が猫の首に鈴をつけるか？」ということの思い描いたのであるが、吉岡、小野寺氏以来の旺盛な協力精神が今後も萎縮することのないよう祈るものである。

最後に、筆者の不確かな記憶を補う教示をして下さった東北大学の松川衛医学分館事務長と小野和夫運用掛長にお礼を申し上げたい。

（昭和52年8月27日受付）